Italian Sonnets Englished
——トマス・ワトソンとペトラルキズム——

岩　永　弘　人

エリザベス朝ソネット詩人とペトラルカの関係を比較した時明らかになるのは、それぞれの詩人がペトラルカを、違ったソースから／違った側面から、取り入れているという点である。その結果、一口にエリザベス朝のペトラルキズムと言っても、最大公約数的な部分を別にすれば、実際にはそれぞれの詩人の個性の数だけ、異なった形のペトラルキズムがあった。つまり、もともとそれぞれの詩人が持っていた個性がペトラルキズムを取り入れ、その詩人独特のペトラルキズムを構築していったのであった。

そのソースとしては、主にイタリアとフランスの詩人たちの作品に分類されるのであるが、当時のソネット詩人の多くが、イタリア直輸入のものより、フランス経由——殊にロンサール（Pierre de Ronsard, 1524-85）、デュ・ベレー（Joachim du Bellay, c.1522-60）、デポルト（Phillippe Desportes, 1546-1606）など——のものに頼った。言うまでもなく、1590年代のソネット大流行よりも一時代前に、ソネット形式をイギリスに紹介しようとしたサー・トマス・ワイアット（Sir Thomas Wyatt, 1503-42）やサレー伯ヘンリ・ハワード（Henry Howard, Earl of Surrey 1517?-47）はペトラルカの直輸入をめざし、実践したが、それからしばらくしてイギリスでのソネット熱はさめ、この詩形が息を吹き返すには第２世代の登場を待たねばならなかった。そして、次世代の詩人たち—

—つまり1590年代のソネット詩人たち——はむしろフランス経由のソネットを書く事になったのである。

本論で論じようとしているトマス・ワトソン（Thomas Watson, c.1556-1592）は、この第2世代に属す詩人であり、その中でも特に先駆者と言える存在である。しかし7年間、あるいは8年間にも及ぶと言われる、大陸での生活や翻訳者としての彼の特質のゆえに、彼自身のソネット作品には、上にあげたような時代の主流とは異なり、ペトラルカを始めとするイタリアの詩人たちから直接の影響を受けたものが多い。要するに、ワトソンは第2世代のソネット詩人たちにペトラルカを中心とするペトラルキズムの原形・モデルを提供した詩人であったと言える。

このようにワトソンは、英国のソネットの歴史を語る時サー・フィリップ・シドニー（Sir Philip Sidney, 1554-1586）と同じくらい重要な詩人であるにもかかわらず、これまであまり顧みられなかった。もちろん、彼の詩についてはこれまで何度も「見直し」がなされ、論文も書かれてきたが——クリストファ・マーロウ（Christopher Marlowe, 1564-93）関連のスキャンダラスな伝記以外は——その度に、また闇に埋もれていった。[1] しかし、ここ数年で2種類のアノテイティッド・エディションも出版され、ワトソンについて再考するよい機会がめぐってきたと言える。[2] 実際、英国ソネットの歴史について書かれた書物には必ず彼の名前が言及されているのであるから。[3]

本論ではワトソンの2つのソネット詩集『ヘカトンパシア』（*Hecatompathia*, 1582、以下HP）と『ファンシーの涙』（*The Tears of Fancie*, 1593、以下TF）をとりあげ、まず第1に彼がイギリスに取り入れようとしたペトラルカ的な要素について考え、そしてその後、そうしていく過程で彼の中で成熟していったと思われる彼独自のペトラルキズムについて見ていきたいと思う。

1　ワトソンと2つの詩集

トマス・ワトソンは1556年ごろロンドンで生まれ、オクスフォードに入学したが、学位は取らずに大陸へと向かい、7年間旅を重ねる。（この長い大陸生活の理由についてはいろいろ説があり、最近ではスパイ説も浮上している。）1577年帰国するが、1580年再びパリへ。そこでウォルシンガムやフォーントなどの要人と知り合う。

再びロンドンに帰ってからのワトソンについては、記録も多い。ソフォクレ

スの『アンティゴネー』のラテン語訳をはじめとして、いくつかの翻訳を手掛け、またイタリアのマドリガルを翻訳したことでも知られている。[4] この頃マーロウと親交があり、そのせいで殺人事件に巻き込まれて投獄された事もあった。出獄後はウィリアム・コーンウォリスの家庭教師をつとめたが、92年死亡。翌年TFが出版された。

さて彼の2つのソネット詩集HPとTFは非常に対照的な成立過程を持つ。HPは、6行×3の18行の詩100篇から成り立っている。この詩集には、献辞やワトソン本人の序詞もあり、書物としての呈をなしている。この詩集について特筆すべき点は、その作品の大部分がイタリアやフランスの詩人たちの翻訳／翻案であり、さらにはそれぞれの作品に、詩人自身による出典と内容の解説がつけてある、という点である。この事実は、詩集の構成という問題の他に、詩集にあらわされている感情の一貫性、つまり詩人が詩を捧げている相手の女性（それがフィクションであれ、事実であれ）への一貫した愛が存在するかどうか、と言う問題と関わってくる。たとえばパルグレイブは、この詩集が他の詩人の詩の寄せ集めであるゆえに、直接的感動は与えにくいという論理を展開している。(Palgrave 93-95) この点については、個人的には必ずしもそうは言い切れないと考えるし、チャタレーも、この詩集にも伝記的事実があらわれている部分があるのではないかという疑いを寄せている。(Chatterly 206)

一方TFは詩人の死後の出版である。詩形は、我々が普通にソネットと呼ぶ14行の詩60篇（ただし、唯一現存するテキストから1枚が破り取られており、実際は56篇しか残っていない）から成る。この作品の一番の問題点はオーサーシップである。まず詩集を全体として見た場合、テキストの最後に‘Finis T.W’とはあるものの、詩人がこの詩集の出版に関与していた可能性は低い。また、後世になって、彼の作品ではないものが詩集に含まれている事が判明した。たとえば、いくつかの詩はジョージ・ギャスコイン（George Gascoigne, 1535?-1577）の作品とほぼ同じである。時代を考えれば、これを「盗作」とみなすかどうかは微妙な問題であるが、それにしても、どの作品がワトソンのオリジナルなのかという問題は依然として存在する。(Scott, ‘Sources’ 303-306)

さて、このように対照的な成立過程をもつ2つの詩集だが、これらを読み比べてみると、両方に共通して出てくる語彙やイメジがあることがわかる。これらはもちろんペトラルカのエコーである場合が多く、一般にペトラルキズムと呼ばれるものである。[5]

本論では、ワトソンのペトラルキズムを理解するモデル・尺度として、ペト

ラルカの詩集『俗語断片詩集』(*Rerum vulgarium fragmenta*) の中の代表作の1つ、カンツォーネ129番を使ってみたい。具体的にはこの詩には詩人の（1）マゾヒズム、（2）両極端／不安定、（3）自然との照応、（4）瞑想、といったような非常にペトラルカ的特徴が見られる。そこで、次章でまずこの129番を細かく見て、その後ワトソンがペトラルカの上に挙げたような要素を、どのように取り入れているか、を見て行く事にしたい。

2　ペトラルカ129番

上で述べたように、ペトラルカ129番のカンツォーネには、ワトソンのソネット群の中に見られる要素の多くが凝縮されている。まず、その全体像を見てみよう。[6]

詩人は、故郷イタリアを離れ、旅の空にある。彼はラウラへの恋慕に浸りつつ、人の多い都会を避け、孤独を楽しみつつ、自らの愛の想いにふけっている。「想いから想い、山から山へと／愛神が僕を導く。人が通った跡のある小径はすべて、／心安らかな生活とは正反対であるのだから。」そこで詩人は「愛神の導くまま」にさまよい、彼の心も同時にさまよう。彼の魂は、「笑い、泣き、恐れ、安らぎ」と揺れに揺れ、「ほんの短い時間しか同じ状態でない。」（1－13）

詩人は人のいない「高い山々や荒涼とした森」を好み、「安らぎを見い出す」が、「一歩歩む度に、僕の愛する人への、／新たな想いが生まれ」その想いが詩人の恋の苦しみを、楽しみへと変えてくれる。そして彼は「この甘くてつらい人生を／かえたいとは少しも思わない。」詩人にはラウラが自分を愛してくれるのではないかという、僅かながらの希望があり、それにすがって生きている。しかしその希望も決して確かなものではない。(14－26)

詩人は「高い松の木や丘が影を作っている場所」でしばしば立ち止まり、心に彼女の美しい顔を描く。」気がつくと彼は涙を流していて、そして自分がラウラ、そして故郷から離れて来た事を後悔しはじめる。しかし再びまたラウラの事を思い出し、自己欺瞞であると知りつつしばしの満足を得る。(27－39)

次の連では、詩人が花鳥風月の中に、ラウラの幻を見る姿が描かれる。「どんなに荒れ果てた場所や／人の住まぬ国にいたとしても、／いやむしろその分だけ美しく、僕の想いは彼女の影を描き出す。／だから、現実がそのような甘い幻想を打ち払う時も、／僕は生きた岩の上の、死んだ石となって、／冷たく

なって座っている。」(40－52)

彼は「欲望」に引かれてさらに彷徨を続け、ある時自分の置かれている立場を認識しつつ、ラウラの姿が「いつも、とても遠く、同時にとても近くにある。」ことを実感し、またしてもラウラが自分の事も思ってくれているかもかもしれない、という微かな希望に賭ける。そして、一時の魂の平安を得る。(53－63)

最後の連は、コンジェード（別れの結び節）と呼ばれるカンツォーネへの呼びかけである。「カンツォーネよ。あのアルプスの向こう、／空がより澄んでいて、喜ばしいところ、／お前は、僕が流れる小川のそばに佇むをの見るだろう。／そこはそよ風が／新鮮で、香り高いローレルで薫るところ。／そこにこそ、僕の心があり、／その心を僕から奪った人がいる。／だからここでお前が見るのは／僕の単なる抜け殻だけなのだ。」

3　ワトソンのペトラルキズム

今あげた129番のどのあたりが、ワトソンのソネットに影響を与えているのかを、先にあげた分類の枠組みを使って見てみよう。

(1) マゾヒズム

まずこの詩の根底を流れる一番の特徴は、詩人側のマゾヒズムである。ペトラルカ129番の該当する部分を挙げてみよう。「一歩歩む度に、僕の愛する人への、／新たな想いが生まれるが、しばしばその想いは／僕が彼女ゆえに抱えている苦しみを、楽しみへと変えてくれる。／それで僕は今のこの、甘くてつらい人生をかえたいとは、／少しも思わない。」(17－21)

ワトソンもこれを受け、次のような詩を書く。まず、ＴＦ38番はこうである。“O would my love although too late lament me, / And pity take of tears from eyes distilling : / To bear these sorrows well I could content me, / And ten times more to suffer would be willing.”（１－４）（ああ、遅ればせながらでも、彼女が僕に憐憫の情をもってくれればいいのに。／そして、僕の眼から流れる涙に憐れみを持ってくれれば。／そうなればこの悲しみの泉に耐える事を喜んでしよう。／そして10倍も苦しみを歓迎しよう。）

一方ＨＰ60では“Was ever man, whose love was like to mine?／I follow still the cause of my distress,／My heart forseeing hurt, doth yet incline／To seek

the same, and thinks the harm the less.”（1－4）（僕のような愛し方をした者がかつていただろうか。／僕は絶えず　自分の悲しみの原因を追いかけ、／傷つく事がわかっている僕の心は、まさにその傷を追い求め、／その痛手もより弱いものと感じる。）

また同じくHP57にも次のようなくだりがある。“A lingering use of love hath taught my breast／To harbour strife, and yet to live in rest.／The man that dwells far north, hath seldom harm／With blast of winter’s wind or nipping frost:／The negro seldom feels himself too warm／If abide within his native coast;”（11－16）（長いこと愛する事に慣れてしまったので、／僕は胸にいつも苦しみを忍ばせている事に慣れ、それでも平気で生きている。／遠い北国に住む人は、／冬の風や刺すような霜にも傷つかないという。／黒人も自分が生まれた国に住んでいる限りは、／暑すぎるとは感じないのだ。）

今挙げた例に見られるのはいずれも、自ら望んで恋の苦しみに身を任せようという態度であった。言うまでもなく、このような恋する女性に対する隷属的な態度はトゥルバドゥール以来の宮廷風恋愛（courtly love）に端を発するものであり、さらにその背景にはプラトニズム――女性の美は天上の真実の反映であり、それを求める事で詩人は精神的に成長できるという発想――が隠れている。[7] このような宮廷風恋愛にもとづいた――自分の愛が成就されない事を大前提をする――ペトラルキズムにおいては、期待される恋の成就よりもそこへ至るプロセスの方が大事なのであり、そこへの道程が大変であればあるほど、価値があるのである。それ故、その苦しみを描く事は、ペトラルキズムの王道となる。

（2）両極端／不安定

2番目の特徴として、2つの極端の間を行ったり来たりする激しい感情の揺れの表現がある。ペトラルカはこうである。「そしてまた、愛神が導くままに、／魂は、笑い、泣き、恐れ、安らぎ、／魂が導くままに従う僕の顔は、／曇ったり、元気づいたりする。／そしてほんの短い時間だけしか同じ状態でいない。／それで、そのような想いを経験した事がある者は一目みて／わかるのだ。『こいつは炎のように燃えていて、精神が不安定だ。』」（7－13）

それに対しワトソンは、TF18番で次のように歌う。

TF 8
O what a live is it that lovers joy,
Wherein both pain and pleasure shrouded is :
Both heavenly pleasures and eke hell's annoy,
Hell's foul annnoyance and heavenly bliss ;
Wherein vain hope doth feed the lover's heart,
And brittle joy sustain a pining thought ;
When black despair renews lover's smart,
And quite extirps what first content had wrought ;
Where fair resemblance eke the mind allureth
To wanton lewd lust giving pleasure scope,
And late repentance endless pains procureth.
But none of these afflict me save vain hope
And sad despair, despair and hope perplexing,
Vain hope my heart, despair my fancy vexing.

（愛神が支配する人生、ひどいものだ。／（そこでは）苦しみと喜びがひとまとめになっている。／つまり、天国の喜びと地獄の苦しみが、／地獄のひどい悩みと、天国の至福、が。／（そこでは）空しい希望が、愛する者の心に餌を与え、／はかない喜びが、弱っていく想いを支えている。／暗い絶望が、愛する者の痛みを新たにし、／満足が作り上げたものを根こそぎにする。／また、美しい見かけが心をさそう喜びに対して、／気紛れでみだらな肉欲に、目的を与えながら。／そして遅すぎる後悔が終わりのない痛みを生み出すのみ。／しかし、これらの事も〈空しい希望〉と〈つらい絶望〉以上には僕を苦しめない。／絶望と希望がからみ合っている。／希望は心を、絶望は愛の想いを、苦しめるから。）

一方HPの方では例えば50番にその典型的な例が見られる。“While others feed, my fancy makes me fast;／While others live secure, I fear mischance;／I dread no force, where other stand aghast;／I follow suit where Fortune leads the dance,”（1－4）（他の者たちがお腹を膨らしている時に、僕の想いは僕を飢えさせる。／他の者たちが楽しく過ごしている時に、僕は不幸を考える。／僕は軍隊など恐れない。他の者たちは茫然自失となるが。／僕は、運命

がリードするダンスに歩を合わせるだけ。)

前者の詩では希望と絶望が、後者では恋している自分と恋していない他の者たちが、両極端として描かれている。相手を恋い慕う者の、一時として同じではないこのような心理は、非常にペトラルカ的なものである。[8] この述べ方は――ペトラルカ自身の意図は別として――揺れ動く心をあらわすレトリックとして、ペトラルカ以降のソネット詩人たちにとっては定番となった。(Forster 20)

(3) 自然との照応

3番目の特徴は、詩人の心象風景と外界(特に花鳥風月的なもの)との照応関係である。ペトラルカの方では、「僕は何度も(誰も信じてくれないだろうが)見た。/澄んだ水に、緑の草に/生きた彼女の姿を。そして、ブナの木の幹に。/あたかもレダに、自分の娘[ヘレナ]は/大陽に曇らされた星のようだ、と言わせるくらいに美しい姿で。/そして、どんなに荒れ果てた場所や/人の住まぬ国にいたとしても、/むしろその分だけ美しく、僕の想いは彼女の影を描き出す。」(40-48)とある。

これをワトソンはTFで何度か用いていて、詩人の心象風景の反映となっている。たとえば25番はその好例である。

TF25
The private place which I did choose to wail,
And dear lament my love's pride was a grove,
Placed twixt two hills within a lowly dale,
Which now by fame is called the vale of love.
The vale of love, for there I spent my plainings,
Plaints that bewrayed my sick heart's bitter wounding :
Lovesick heart's deep wounds with despair me paining,
The bordering hills my sorrowing plaints resounding. (1-8)

(僕が泣き、そして愛する人の高慢さをひどく悼むための/ひそかな場所は、森だ。/それは2つの丘に囲まれた低い谷にあり、/そこは今では「愛の谷」という名で知られている。/愛の谷。というのも、そこで僕は嘆き暮らすから。/嘆き。それは、僕の病んだ心のひどい傷を露わにする。/恋の病にかか

った心の、深い傷は、僕を苦しめ、／まわりの丘は、僕の悲しい嘆きをこだまに返す。）

「愛の谷」という表現は、ペトラルカの129の「暗い谷」から着想を得たものと思われ、それは恋する者は自ずと自然にむかい、そこに孤独を求める、という考え方に由来している。

一方、TFの51番は、同じ自然と向き合うものではあるが、外的風景と詩人の内的風景のギャップを嘆い

Each tree did the wishëd springtime's pride
When solitary in the vale of love
I hid myself, so from the world to hide
The uncouth passions which my heart did prove.
No tree whose branches did not bravely spring ;
No branch whereon a fine bird did not sit :
No bird but did her shrill notes sweetly sing ;
No song but did contain a lovely dit : （1－8）

（それぞれの木が待望久しかった春の盛りを示していたが、／一方僕は一人愛の谷に隠れて、／世間から隠していたのだ。／僕の心が感じている惨めな感情を。／（そこには）枝が元気よく芽吹く木もなかったし、／きれいな鳥が止まる枝もなく、／甲高いメロディーを美しく歌う鳥もいないし、／甘美な小唄の入った歌もなかった。）

これらの作品の他にもワトソンは、特にTFの中で、牧草地、泉、井戸、などの自然物や季節の風景などを巧みに取り入れ、そこに自分の想いを反映させたり、それらと対話したりして自分の想いを紛らせている。（TF　25、26、27、29、30、47）

このような自然と詩人の内的葛藤の照応／対比も、ペトラルカ以来のいろいろな詩人に使われてきたものである。これは１つには、自然の美しさの中に、美という連想で相手の女性を連想する、という事もあるだろうし、また、自然が美しいがゆえに自分のみじめさが余計際立つという言い方もできるだろう。しかし、いずれの場合も共通しているのは、詩人が恋に盲目になっていて、現

実の世界を正しく認識できていないという点である。おそらく自然は、現実の世界の代表、あるいはメタファーとしてそこにあり、詩人は幻想または瞑想の世界の住人なのである。この事は次に考える‘fancy’の意味と無関係ではない。

4　瞑想——pensieroとfancy

以上ペトラルカの129番をモデルにしながら、ワトソンのソネットの特徴を3つ見てきたが、ここではその特徴の最後としてさらに、その瞑想性を考察してみたい。ペトラルカは詩の中で、ラウラへの想いに対して、外的世界にその同等物を作り上げるが、同時に彼自身の内側にもその影を生じさせる。その際彼は、‘pensiero’という多重の意味内容を持つ語を使っている。当然ワトソンにもこの語と同じ概念をあらわす言葉があるのではないかと考えられるが、ここで仮説としてあげたいのは、‘fancy’という英語——彼の詩集のタイトルの一部にもなっており、また2つの詩集中に頻出する語（HP 6回、TF 9回）——が、このペトラルカの‘pensiero’（及びその派生語）というイタリア語の訳語ではないか、という点である。ちなみにここでモデルとしたペトラルカの129番では、‘pensiero’とそれに類する語が6回使われている。その典型的なものが、書き出しの「想いから想い、山から山へと／愛神が僕を導く。人が通った跡のある小径はすべて、／心安らかな生活とは正反対であるのだから」である。

*Grande Dizionario della Lingua Italina*によれば、‘pensiero’には「想像力」、「考える事」、「気紛れ」などの語義の他に、‘Intenzione o disposizione amorosa verso una persona; desiderio amoroso’（ある人物に対する、愛の想い、傾向；愛の欲望）という意味がある。[9] また1598年に出版されたフローリオのイタリア語辞書を見ると、‘pensiere’の定義として、‘thought, care, imagination, musing, surmising, deeming’とある。[10] つまり、「愛の想い」という定義がイタリア語の‘pensiero’には存在するのである。そこで、仮説として問いたいのは、その‘pensiero’の意味内容を、ワトソンが‘fancy’としてイギリスの詩に輸入したのではなかったか、という点である。‘fancy’について少し考えてみよう。

OEDを見れば明らかなように、語源的には‘fancy’という語は‘fantasy’が縮約された形で「15世紀にできた言葉だが、シェイクスピアの時代には、多少とも違う意味を持つようになった」語である。[11] その意味としては、現代英語で普通の「気紛れ、個人的好み」という語義を持っていて、ワトソンもそれを用いている。この意味で‘fancy’という語が使われているものにTFの1番、HPの1

番、38番、69番がある。

たとえばTF１番では「まだ年若くて、愛神の毒矢やその苦い毒液で、傷ついていなかった頃。／心も思考も気まぐれな想い（fancy）に毒されていず、／のんきに、喜びのボールを追いかけていた頃。」（１－４）と、自分が、まだ愛する女性に出会い、苦しむ前の状態を歌うのに使っている。もちろんこの詩は詩集の最初の詩であり、ペトラルカの冒頭の詩を意識して書かれている事は間違いない。[12]

一方HPの冒頭の詩では「僕はこれまで、回避しようとして、一所懸命努力した。／幻想（fancy）が、愛の気まぐれ（conceit）の上に作り上げたもの、を」(13－14) とある。また次のHP38のものは、「好み、思い込み」の意に近いだろう。「教えてくれ。いつ、そしてどのようにして、僕が初めて僕の思い込み（fancy）を始めたか。／誰のために、僕が意志と知恵を捨てたか、を。自らあえて、呪われた道を選んだのか、を。」（８－10）

しかし、一方この‘fancy’という語については、「五感には感じられない物事を精神的に形作る能力、過程」という意味から「（文学的）想像力」、「幻想、幻覚」、「根拠のない推測」「独創的な創造性」などの意味が派生した。ここから「愛の想い」という、「根拠のない好み」という意味も生じてくる（OED 8b）と考えられる。[13]ワトソンの中でこのような意味で使われている‘fancy’の例として、先にもあげたTF８があげられる。“But none of these afflict me save vain hope／And sad despair, despair and hope perplexing,／Vain hope my heart, despair my fancy vexing.” (12－14)（しかし、これらの事も＜空しい希望＞と＜つらい絶望＞以上には僕を苦しめない。／絶望と希望がからみ合っている。／希望は心を、絶望は愛の想いを、苦しめるから。）また、例えばＨＰの64番を見ると、ワトソンのfancyが理性と対照的なものである事がわかる。“For what can counsel do to quench the fire／That fires my heart through fancy’s wanton will?／Fancy by kind with reason striveth still.” (16－18)（というのも、僕の愛の想いの気まぐれな意志で僕の心を燃やしている／いったい何が、その炎を消すための忠告を持っているというのだ。／愛の想いはもともと、絶えず理性と争うものなのだ。）つまり、‘fancy’は、「気紛れ」から始まった「愛の想い」であり、理由がない故に、それを理性的に追い払う事も叶わないのである。これら２つの例で、詩人は‘fancy’に苦しめられ、‘fancy’ゆえに相手の女性を愛する様子を歌っているのである。

以上見てきたような多重な意味内容を持つ‘fancy’は、ペトラルカ129番に見

られたようなペトラルカ的憂鬱‘pensiero’の意味内容とかなり重なるものを持っていて、この語の訳語としては非常に相応しいものだったと言えるのではないだろうか。

もちろんワトソンにとっては、この語に附随してくる他の意味――「気まぐれ」とか、「根拠のない想像・画像」――も、詩の奥行きを広げるためには都合がよかっただろうと想像され、彼はこれらすべての意味を含めてこの語を用いたと考えられる。その際、ペトラルカにこだわり続けた詩人ワトソンであるからには、この‘fancy’という語も、ペトラルカが用いた何らかの言葉を、英語に訳したものであると考えるのが妥当であろう。そして結果として‘fancy’という語を選択したと推察される。

このように考えてみると、*The Tears of Fancie*という詩集名も大きな意味を持ってくるように見える。（もちろん、このタイトル自体は詩人本人がつけたものではない可能性も高い。もしこのタイトルを考えたのが、ワトソン以外の人物だとすれば、その人物はこの詩集の性質を非常によく理解していたと言える。）この詩集にとって〈ファンシー〉はまさにキーワードであり、愛の始まりから瞑想、詩的想像力、までがこの語でカバーできるのであるから。言い換えれば〈ファンシー〉は、単に恋愛に関する〈物思い〉に留まらず、恋愛（あるいは女性）をきっかけとして引き起こされる、より崇高な〈瞑想〉を指し示す。もちろんこれが、プラトニズムの基本的概念とも合致することは言うまでもない。[14]

5　ワトソンの個性

ワトソンは、上記の４つのパターンに代表されるようなやり方で、ペトラルカ／ペトラルキズムを取り入れたのであった。詩人が別の詩人をモデルと模倣、学習する際、そのモデルのどのような側面を取り入れるかという選択の中に、すでにその詩人の個性があるという事は今さら言うまでもない。そう考えれば、今まで見てきたワトソンの詩が彼なりのペトラルキズムの表現と言えるだろう。それではワトソンの場合、そこからさらに進んだ――つまり〈輸入〉、〈受容〉を超えた――詩的個性というものは存在したのだろうか。最後にそれを考えてみたい。

これまで見てきた詩で明らかなように、彼の詩の形式上の大きな特徴としては、シンタックスの単純さや使用語彙の少なさ・短さ、などがあげられ、それ

は彼の詩の素朴な雰囲気をつくり出すのに貢献している。これはHPとTFに共通している特徴である。一方内容については、本論の冒頭で述べたように、HPは非常に体裁の整った詩集である反面、様々な詩人の作品のパスティーシュのような様相を呈し、語り手の真情や苦しみをうたった詩集とは考えにくい。逆にTFの方は、詩集としての体裁やテキストの不安定性を持ちながらも、一貫したものを持っているように見える。当然彼の個性が覗き見れる詩も、TFに見つけだす事ができる。(この時代の詩の個性とは、現代で言ういうな述べられる内容の新しさではなく、述べ方、歌い方の新しさである。)

その例としてここではTF46番をあげたい。

My mistress seeing her fair counterfeit
So sweetly framed in my bleeding breast :
On it her fancy she so firmly set,
Thinking herself for want of it distressed.
Envying that any should enjoy her image,
Since all unworthy were of such a honour,
Then gan she me command to leave my gage,
The first end of my joy, last cause of dolour.
But it so fast was fixed to my heart,
Joined with unseparable sweet commixture,
That nought had force or power them to part :
Here take my heart quoth I, with it the picture.
But oh, coy dame intolerable smart,
Rather than touch my heart or come about it,
She turned her face and chose to go without it.

(私の愛する人は、自分の似姿が／僕の血を流す胸で、可愛く縁取られたのを見た時、／彼女はとてもそれが気に入ってしまい、／それが欲しくてたまらなくなった。／他の誰かが自分の似姿を持つ事を／よしとしなかったのだ。／というのも、そのような名誉に浴する人は自分しかいないと思ったから。／それで彼女は僕にその記念の品を渡せと命じた。／僕の喜びの目的であり、僕の悲しみの最終的な原因を。／でもその似姿は、分かちがたい甘美な接合でもって／あまりにもしっかりと結びついていたので、／それらを引きはがせる人は

だれもいなかった。／「ほら、僕の心臓を持っていって、それといっしょに絵も。」僕は言った。／でもああ、僕の、ひどく賢く、気取った乙女は、／僕の心臓にさわったり、近寄ったりすることを避け、／顔をそむけて、絵を取らずに行ってしまった。)

ジョンも指摘している通り、ここに述べられているような、詩人の胸に相手の女性の肖像画があるという言い方は――少しひねってはあるが――基本的には中世からの伝統に基づいている。(John 101) 自分の似姿が詩人の胸に置かれている事を知った女性は、この画像を欲しがる。詩人としては、それは自分の恋の形見であり、渡したくないとだだをこねるが、愛する女性の頼みは断れず一度は同意する。しかし、相手の女性は気紛れで、自分の心臓からその画像を引き剥がそうとすると、彼女は詩人の心臓に近づく事は嫌がり、似姿を取りもせずに去っていく。

ここで詩人は、自分の辛い思いを吐露しながら、相手の女性の美を賛美し、同時に女性に対して恨み後を述べて一矢報いるという、３つの事を同時に行うという離れ業を行っている。しかもその３つがばらばらではなく、画像という１つのイメジに収斂されているとという点で、ウィットの効いた秀作であるが、この詩を特に他のペトラルキズム詩と違うものにしているのは、イメジの〈癒着〉であると思われる。

誤解を恐れず、そして単純化して言えば、ここではペトラルカ的二分法は成立せず、詩人の心臓と彼女の似姿は癒着を起こしている、と思われる。詩人の愛の思い全く無視している女性が、自分の肖像画を要求する時、詩人はそれを自分の胸から引き剥がそうとする。この時詩人の中では、女性への隷属（肖像画を渡そうという気持ち）と詩人の強い情熱（肖像画を渡したくないという気持ちと、渡そうと決心したあとでも画像がはがれないという事実）が膠着状態にある。このソネット自体は、女性の気紛れによって結末がつけられてはいるが、詩人の状況には何ら決着がついていない。

このような癒着した状態こそが、ソネット形式のイギリス化の１つの証しなのであり、この癒着はシェイクスピアやダンのソネットによって頂点に達する。〈癒着〉とは、言い換えれば経験主義的なリアリズムとも定義できるだろう。ワトソンのソネットは、ペトラルカ的な二分法を超えて、このような科学的、論理的なリアリズムをも内包していた。

もちろん本論の前半で論じてきたようにワトソンはペトラルカの模倣者・紹

介者であり、当時のイギリスのどの詩人よりもペトラルカを熟知していた。しかし同時に彼は単なる模倣者ではなく、そこから一歩進んで彼自身の——イギリス独自の——ペトラルキズムを構築しようと試みたと言える。ソネット第2世代の旗手としてのワトソンの存在意義は、まさにここにあったと言ってよいだろう。

＊テキストは、ワトソンについてはチャタレーのものを、ペトラルカについてはダーリングのものを使用した。和訳は全て拙訳である。

Notes

1　ワトソンとマーロウとの関連は、エクレスの「発見」によるものが大きい。その後、マーロウ関連の伝記には必ず彼の名前が登場してきた。そこで必ず語られるのは、ブラッドレーという男との傷害事件であり、この件でワトソンもマーロウも投獄された。

2　ワトソンの「見直し」は、数十年ごとに行われてきた。まずその大きなきっかけは、彼の詩集が出版され、パルグレイブによって書評が書かれた1872年である。次の「見直し」は1957年のマーフィによるもの。また、彼のマドリガルの紹介については、チャタレーの功績が大きい。ただし、文学史や詩史においては、ワトソンの名前はもっと頻繁に言及されてきた。そして、この数年でサットンとチャタレーの注釈版が上梓されたという事情がある。

3　たとえば、Scott, Dubrow, Johnなど。

4　Thomas Watson *Italian Madrigals Englished* (1590).

5　ペトラルキズムの定義やこれに関する文献には枚挙に暇がないが、依然としてその枠を定める事は困難である。その理由として一番大きいのは、ペトラルカ自身の詩法と、それを模倣した詩人たちのそれが区別しにくいという事情が反映している。もちろんそれでも、ペトラルキズムを定義しようという試みは、いつもなされてきた。たとえば、ルトヴェンによればそれは、撞着語法、誇張法、の２つに集約され、それを表現するレトリックとして、対照法、パラドックスなどが使われる、と定義している。またフォスターは、ピリッツを引用して、ペトラルカ的詞藻を（１）外的なもの、（２）内的なもの、（３）宇宙的な現象としての愛、の３つに分類している。(Ruthven 17-30, Forster 8 － 9）しかし、デュブローも言うように、「ペトラルカと定義しようという試みは、いつも危険である。何故ならペトラルカ自身の作品とペトラルカの模倣者たちを区別するのは不可能であるのだから。」(DuBrow 16-17) ここではその全体的な定義は避け、ジョンが試みたペトラルキズムのイメジの分類の枠組みを使うのとどめる事にしたい。それは（１）愛の力を示す存在としてのキューピッドの存在をうたうもの、（２）愛する女性の内的徳や外的美をうたうもの、（３）その女性を愛する詩人の内的・外的状況、また喜びや悲しみ、をうたうもの、の３つである。もちろんワトソンのソネット群もこれら３つに分類できるが、その中でも本論では（３）を中心に論じた。(John 5）

6　HPで取り上げられているペトラルカの詩の中に、この129番に近い詩――132番と134番――がある事も、その論拠と言えるかもしれない。

　参考のために129番の試訳をあげておく。

「想いから想い、山から山へと／愛神が僕を導く。人が通った跡のある小径はすべて、／心安らかな生活とは正反対であるのだから。／もし、人里離れた斜面に、川や泉があれば、／２つの山頂の間に、暗い谷があれば、／そここそ、僕の途方に暮れた魂が安らぐところ。／／そしてまた、愛神が導くままに、／魂は、笑い、泣き、

恐れ、安らぎ、／魂が導くままに従う僕の顔は、／曇ったり、元気づいたりする。／そしてほんの短い時間だけしか同じ状態でいない。／それで、そのような想いを経験した事がある者は一目みて／わかるのだ。「こいつは炎のように燃えていて、精神が不安だ。」／／高い山々や荒涼とした森に、僕は／ある安らぎを見い出す。人が住んでいるところは、／僕の目には不倶戴天の敵。／一歩歩む度に、僕の愛する人への、／新たな想いが生まれるが、しばしばその想いは／僕が彼女ゆえに抱えている苦しみ／を、楽しみへと変えてくれる。／／それで、僕は今のこの、甘くてつらい人生を／かえたいとは少しも思わない。／というのも僕は思うからだ。／「たぶん、愛神がもっとよい時のめに／きみを守ってくれるだろう。／たぶん、きみ自身にはつまらない／人間でも、他の人［ラウラ］には価値／がある人間かもしれない。」／でもため息ながらに、こんな考えもよぎる。／「そんなことがありえるだろうか。どんな風に。いつ。」／／高い松の木や丘が影を作っている場所で、／僕はしばし立ち止まり、／最初に見つけた岩に座り、／心に彼女の美しい顔を描く。／我に返った時、僕の胸は涙で濡れていて、／そして言うのだ。「ああ、お前はどこに辿り着いたことか。／お前はどこから立ち去ってきたのか。」／／しかし、僕の憧れる心が僕の最初の想いににとどまり、／彼女を見て自分を忘れている間に、／ぼくは愛神がとても近くにいて、／魂がその得意の騙しに満足しているのを感じる。／あまりにも多くの場所で、あまりにも美しい彼女を見たので、／もし欺瞞が続くとしても、もうこれ以上は尋ねない。／／僕は何度も（誰も信じてくれないだろうが）見たのだ。／澄んだ水に、緑の草に生きた彼女の姿を。／そして、ブナの木の幹に、白い雲に、／あたかもレダに、自分の娘［ヘレナ］は／大陽に曇らされた星のようだ、と言わせるくらいに美しい姿で。／／そして、どんなに荒れ果てた場所や／人の住まぬ国にいたとしても、／むしろその分だけ美しく、僕の想いは彼女の影を描き出す。／だから、現実がそのような甘い幻想を打ち払うときも、／僕は生きた岩の上の死んだ石となって、／冷たくなって座っている。／想い、泣き、書く者のように。／／高い山の影がささないような場所、／一番高く、一番自由な頂きに／強烈な欲望が常に僕を引っ張っていく。／ここで僕は眼でもって、自分の悲惨さを測りはじめる。／そしてその間、泣きながら／悲しみの露でしめった心を涙ながらにぶちまける。／そしてどれぐらい遠い距離が／あの美しい顔から自分を遠ざけているかを／思い、考える。／その顔はいつも、とても遠く、同時にとても近くにある。／／そのあと僕は静かに言う。「ああ、／お前は何を知っているというのだ。／あちらでひょっとしたら、おまえが遠くにいる事を／（彼女は）嘆いているかもしれぬ。／こう考えると僕の想いは、もう一度息を吹きかえす。／／カンツォーネよ。あのアルプスの向こう、／空がより澄んでいて、喜ばしいところ、／お前は、僕が流れる小川のそばに佇むをの見るだろう。／そこはそよ風が／新鮮で、香り高いローレルで薫るところ。／そこにこそ、僕の心と、／その心を奪った人がいる。／だからここでお前が見るのは／僕の単なる抜け殻だけなのだ。」

7　アンリ・ダヴァンソン、新倉俊一訳『トゥルバドゥール――幻想の愛』（東京：筑摩

書房、1985)、225－250。

8 このレトリックで一番代表的なペトラルカのソネットは、「平和が見つからない、しかし戦も望まない。僕は恐れ、同時に希望を持つ。燃えながら、同時に氷である。」で始まる134番である。

9 *Grande della Lingua Italiana* (Milano : Utet Editore).

10 John Florio *A World of Words* (1598).

11 OED、'fancy'の項参照。

12 ペトラルカの最初のソネットは「このとりとめのない詩に、ため息の音色を聞く者たちよ。／そのため息は、僕が最初の青春の過ちの時、／僕の心を育てたのだ。／僕は今の僕とはかなり違った人間だった。」と始まる。

13 8.b. 'amorous inclination, love.'

14 拙論「ヘンリ・コンスタブル『ダイアナ』の「鏡」――プラトン的愛の装置――」『英米文学』(立教大学) 63号 (2003) 2－3。

Works Cited

Cecioni, C. G. *Thomas Watson e la tradizione petrarchistra.* Milan : Principasto, 1969.

Chatterly, Albert. ed. *Thomas Watson : English Poems.* Norwich : Marion Hopkins, 2003.

DuBrow, Heather. *Echoes of Desire――English Petrarchism and Its Counterdiscourse.* Ithaca: Cornell UP., 1995.

Eccles, M. *Christpher Marlowe in London.* Mass : Cambridge UP, 1934.

Durling, Robert M. *Petarch's Lyric Poems : The Rime Sparse and Other Lyrics.* Harvard UP, 1976.

Forster, Leonard. *The Icy Fire――Five Studies in European Petrachism.* London : The Cambridge University Press, 1969.

John, Lisle Cecil. *The Elizabethan Sonnet Sequences: Studies in Conventional Conceits.* NY : Russel and Russel, 1964.

Kennedy, W.J. *The Site of Petrarchism――Early Modern National Sentiment in Italy, France, and England.* Baltimore : The Johns Hopkins UP, 2003.

Murphy, W. "Thomas Watson's *Hecatompathia* [1582] and the Elizabethan Sonnet Sequence." *Journal of English and German Philology* 56 (1957) : 418-428.

Nicholl, Charles. *The Reckoning――The Murder of Christopher Marlowe.* London: Picador, 1993.

Palgrave, F.T. "Thomas Watson : *Poems.*" *North American Review* 234 (1872) : 87-110.

Ruthven, K.K. The Conceit. London : Methuen, 1969.

Scott, Janet G. *Les Sonnets Élizabéthains――Les Sources et L'apport Personnel.* Paris: Librairie Ancienne Honore Champion, 1929.

—— "The Sources of Watson's 'Tears of Fancie'." *Modern Philology* 21 (1926) : 303-306.
Sutton, Dana F. *The Complete Works of Thomas Watson.* Lewiston ; Lampeter : Edwin Mellen, 1996.

Italian Sonnets Englished——Thomas Watson's Two Sonnet Sequences and His Petrarchism

Hiroto Iwanaga

The English poets who took an important role during the sonnet vogue in 1590's succeeded in assimilating the various aspects of Petrarch from the various foreigin sources and, as a result, each English poet in those days resulted in creating his/her own petrarchism. For the most part, though, they resorted to the French sources, such as the works of Pierre de Ronsard (1524-85), Joachim Du Bellay (c.1522-60) and Philippe Desportes (1546-1606). Some decades before this vogue, however, Sir Thomas Wyatt (1503-1542) and Henry Howard, Earl of Surrey (1517?-1547), who depended their style upon the Italian poets —— especially Petrarch —— for their model, had attempted to import the Italian sonnet form to England and to help it take root in England. For some reason, this short craze soon faded away. And, as pointed out above, in 1590's the poets of next generation suddenly appeared and tried hard to create their original sonnet form in England.

Thomas Watson (c.1556-1592), belongs to this next generation and can be called one of the forerunners of this second generation. He, however, got his main inspiration from the Italian sonnets in contrast to the tendency of the other poets of the period mentioned above. He is said to have spent seven or eight years in the Continent in his teens, so it is natural for him to be familiar with several foreign languages and literature, especially those in Italian language. In this paper, his two sonnet sequences —— *Hecatompathia* (1582) and *The Tears of Fancie* (1593) —— are explored in comparison with that of Petrarch.

I classified the characteristics of Watson's sonnets into four categories by their rhetorical tendency: (1) the poet's masochism (2) the antithetical structure of the sonnets (3) the relationship between the poet and natural world and (4) the poet's introspective tendency. Also, as a model for analyzing Watson's petrarchism, I chose Petrarch's canzone 129, in which the four aforementioned

elements of petrarchism are included.

Firstly, the former three features —— (1) masochism (2) antithesis (3) nature —— are exemplified and discussed together. Then, the fourth element, which is the poet's introspective tendency, is also investigated separately, because the fourth element is quite'Watsonian'and it connects Petrarch directly with Watson. Through these analyses, I made a hypothesis that Watson translated the Italian word'pensiero'(and its derivatives) used by Petrarch into the English word'fancy'. (This word was used in the title of his sonnet sequence, *The Tears of Fancie*.)

Lastly, whether Watson had his own originality or not is discussed. In Number 46 of *The Tears of Fancie*, he tried to express the subtle emotions caused by his lady, which cannot be told with a simple rhetoric such as dichotomy or oxymoron. In other words, the poet attempted to analyze and represent his inner state of mind not by the simple antithesis or paradox but through the realistic method. This distinguished feature could be noted as Watson's own version of petrarchism and it was handed over to his successors as a model of English petrarchism.